

随想

不思議なご褒美

高田太久吉

天候に恵まれた8月始め、「岳友」の知見邦彦氏に連れられて3泊4日の南アルプス(北岳～塩見岳)縦走を無事に終え、塩見岳の麓にある解放感満点の露天風呂で汗と足腰の疲れを洗い流し、伊那大島駅近くの蕎麦屋でたっぷり辛味大根を効かせた汁で程よく冷えたざる蕎麦の大盛りを腹に納めると、日頃めったに感じる事のない確かな充実感が体の奥から自然にこみ上げてきた。

この充実感はきっちり1年ぶりのもので、やはり知見氏に従って今年の8月頭に白馬から鹿島槍への4泊5日の縦走を終え、長い下りに難渋しながら大町駅に戻り、猛暑の中を大系線から中央線に乗りついで、車山中腹の山荘に帰り着き、すぐに熱めの風呂をたてて湯船に寝そべったときに感じたあの充実感が思い出された。

山に登山者に元気をくれるというのは良く聞く話である。かなり以前のことであるが、日頃生活に不満の多い友人の一人が、山に行ってくると1カ月ほど元気になって、新しいことをやってみようとする意欲がわいてくると話すのを聞いたことがある。この友人はアルプス縦走を試みるような人物ではないから、おそらく手軽な日帰り登山のことを言っていたのであろう。だとすれば、それほど手軽に一カ月もの元気がもらえる登山は、なんと安上がりの強壮剤であろうか。

しかし、人並み以下の体力しか持ち合わせていない私には、十数キロのリュックを背負って、標高3000メートル前後の山をいくつも越えて縦走することは、正直大仕事である。数日にわたって、一日当たり7～8時間も山道の上下を繰り返せば、消費するエネルギーも日頃のそれとは比較にならない。その証拠に、歩いている間は、休憩ごとに水と一緒に何かエネルギー源になるものを口に入れている。

この消費エネルギーの莫大さと、それに伴う肉体的労苦の甚大さを考えると、山行きを終えて下界に降った時に感じるあの確かな充実感の原因はまったく不思議としか言いようがない。いったい、山はどうやって人間に元気をくれるのだろうか。

山に入る人たちは千差万別で、それぞれ自分なりの目的を携えて山に入っているに違いない。登ってみたい山はたくさんあるから、一つの山に登れば次はどの山と、新



しい目標が浮かんでくるだろう。百名山などというリストができれば、その完登を目標にする人が当然いるだろう。さらに、百名山の完登者が増えてくれば、最短日時での完登を目指す人がでてくるのも自然である。写真の好きな人には、山は無限のシャッターチャンスを提供してくれる。山岳雑誌の写真コンクールに入選することが、次の山行の目的になってもおかしくはない。目標など持たない他の生き物とは違い、人間は、些細なことから大それたことまで何でも目標にできる動物である。

エベレストに最高齢で登るとか、8000メートル峰14座を単独で完登するとか、いずれにしてもはっきりとした目的をもって山に入り、見事その目的を達成すれば、大きな達成感を感じるのは当然だ。しかし、すべての登山者が、山行の都度、何か達成すべき目標を携えて山に入るわけではないであろう。むしろ多くの登山者は、写真では見たが登ったことのない山に行ってみたいとか、若いころに登って感動した山に、もう一度登ってみたいとか、著名な文人の紀行に触発されて自分もその踏み跡を辿ってみたいとか、その程度の動機で何日もの肉体的労苦とかなりの経済的出費をいとわず、自ら嬉々として山に向かっているのではないだろうか。

私の場合も、正直を言って、山に入るのにほとんど目的らしい目的を持たない。有るとすれば、下界から見える山の奥の何重もの山並に抱かれた頂きに立ってみたいとか、薄暗い樹林の道を何も考えないで長時間歩きたいとか、見晴らしの良いなだらかな稜線のゆったりと曲がった道を、はるかな先の頂きを望みながらのどかな気持ちで辿りたいとか、せいぜいその程度の「目的」である。だから、疲れれば、目の前に百名山の一つの頂上があっても、のんびり休んで同行者が登頂して帰るのを待っていることもある。どの山であれ、頂上に達すること自体は、私にとってそれほど重要なことではない。要するに、私も山に入れば一人の登山者ではあるが、もとより登山家ではないのである。

その程度の動機でも、私にとって何日もの苦しい山歩きの動機としては十分であるが、はっきりしているのは、そこに達成すべき目的と言えるほどのものは無いということである。したがって、大きな達成感などというものは、始めから期待していない。それがなぜ、縦走を終えた時に、単なるくたびれ儲けに終わらず、あの体の芯から湧いてくる確かな充実感に結びつくのかは、自分でもいまだに良く分からない。

山は、個々の登山者の動機や目的に関わりなく、その労苦に対して等しく寛大にご褒美として元気をくれるのだろうか。

そういえば、昨年の夏に後立山縦走を終えて車山の山荘に戻り、5日



ぶりに八ヶ岳の見なれた山並みをゆっくり眺めた時の不思議な気持ちを思い出す。私は、それまで八ヶ岳の幾つかの峰に登ったことがあり、とりわけ北八ツと呼ばれる山域には何度も足を運んでいたが、主峰の赤岳にはまだ登頂していなかった。麓から見上げる八ヶ岳はなかなか堂々として南北に幾つもの峰を連ね、中でも主峰赤岳のむき出しの赤茶けた岩肌には厳しい威厳が感じられた。しかし、白馬から鹿島槍までいくつもの岩の峰を超えてきた後では、八ヶ岳はほとんど日頃の威圧感や厳しさのない、平凡なほど穏やかなただの山並みに思われた。

それから程なくして、近くに山荘を構える知人を誘って、赤岳の日帰り登山を試みた。その山行は、もっともポピュラーな美濃戸口から行者小屋を辿るコースをとったせいもあり、登山というよりハイキングの感覚であった。別に自分の脚力を過信しているわけではないが、これを機に赤岳に対する私の向き合い方が大きく変わったことは事実である。冬の赤岳が容易な山ではなく、強風と寒さが厳しい山であることは、幾つもの紀行で読み、いろいろな人たちから聞かされてもいるが、いつか機会があれば、適切なガイドを得て登ってみたいと考えるようになった。ひょっとすると、この感覚が、後立山で元気をもらった証だったのであろうか。

ところで、山歩きは非日常の世界だということもしばしば耳にする。非日常という言葉に込められる意味合いも、人によりけりではあろうが、日頃狭い仕事場で書物と書類の山に取り囲まれて机に向かい、目の前30センチのディスプレイを見ながらごそごそ手を動かしている暮らしかから見れば、常に広大な山岳風景や高山植物を目にしながリリュックを肩に日がな一日歩き続けるアルプス縦走は、あらゆる点で私の日常とは対極的で、非日常であることは間違いない。

しかし、山がわれわれにくれる確かな元気は、何日か非日常の世界に身を置くこと、言い換えれば日頃の生活を忘れて無心に遊びに興じることだけに由来しているとは思われない。第一、非日常は、山登りだけではない。スキーだって、海上での魚釣りだって、登り窯での焼きもの作りだって、さらにはバスに揺られての手軽なツアー旅行（変な言い方であるが）だって、多かれ少なかれ非日常である。しかし、私の経験からいえば、これらの行為から得られる充実感と、アルプス縦走の後で得られる充実感とは、明らかに異質のものである。

この違いに関して思い当たるほとんど唯一の説明は、アルプス縦走に伴う肉体的労苦が、通常のスキーや魚釣りなど（もちろん、大変な労苦を必要とするスキーや魚釣りがあることは知っているが）とは比べ物にならないほど大きいことと関係しているのではないかとことである。われわれが期待するものが達成感であれば、その大きさは目標の大きさや目標達成までの困難さに比例するだろう。しかし、私の場合のように、ほとんど目標らしい目標もない、単なる遊びとは言え肉体的には苦しい登山から大きな充実感が得られれば、それは明らかに達成感とは別のもので、数日にわたる労苦が下山という形で終了することからくる肉体的解放感とその正体なのではなからうか。だからこそ、あの伊那大島の蕎麦屋でしみじみと感じた充実感は、おそろしくストレートで、身に染みるものだったのである。

今夏の山行を思い出しながら拙い文章をここまでつづり、ふと現実に戻って周りを見渡すと、私を取り巻いているのは相変わらずの書物と書類の山であり、私の目を塞いでいるのは、恐ろしく無機能的なパソコンのディスプレイであった。